

責任ある化学物質管理

花王は、世界の人々が化学物質の恩恵を享受し、そのリスクが適切に管理される安全・安心な社会であることが大切だと考えます。この社会の実現に向けて、ESG(環境・社会・ガバナンス)活動を通じて「責任ある化学物質管理」を推進し持続可能な社会の実現に貢献していきます。

社会的課題

化学物質は私たちの生活を育み、世界の人々の豊かな生活文化の実現に不可欠です。その反面、化学物質が人と環境に負の影響を与えてしまう側面もあります。

化学物質による汚染は、地球環境や人の健康さらに生態系の破壊などのリスク要因とされ、気候変動、生物多様性損失と共に地球の三重の脅威と称されています(UNEP, 2023)※1。化学物質管理に関する国際的な2020年目標は未達に終わり、関係する幅広いステークホルダーの参加と野心的かつ具体的な化学物質管理が求められています。2023年9月にはその後継となる枠組みが国連環境計画において採択されました(UNEP, 2023)※2。化学産業の成長は加速し、化学物質と廃棄物の適切な管理はSDGs実現に必須であること、三重の脅威に包括的に取り組むこと、すべてのステークホルダー・セクターが連携していくことが確認・約束されました(UNEP, 2023)※1。

※1 化学物質に関するグローバル枠組みのハイレベル宣言
<https://www.chemicalsframework.org/bonndeclaration>
※2 2020年以降の化学物質に関するグローバル枠組み採択
<https://www.chemicalsframework.org/page/text-global-framework-chemicals>

方針

花王は、責任ある化学物質管理をESG戦略における重点取り組みテーマのひとつとして位置づけています。

我々は、世界の人々が化学物質の恩恵を享受し、リスクが適切に管理される安全・安心な社会の構築に貢献したいと考えます。この社会の実現に向けてESG活動を通じて、「責任ある化学物質管理」を先導していきます。本方針は下記に公開しています。

 責任ある化学物質管理推進の基本方針
<https://www.kao.com/jp/innovation/safety-quality/saicm/saicm-policy/>

P43

Our ESG Vision and Strategy > 指標と目標

リスク要因と花王にとってのリスク

	項目	花王にとってのリスク
環境変化	気候変動(気温上昇による自然災害の多発、エネルギーコストの上昇等)及び、生物多様性の損失	工場操業停止
		サプライチェーンの分断
		原材料価格の上昇
		自然由来原料の不足・入手困難
政策と法規制	炭素税等の環境税導入	石油化学原料の価格上昇
	リサイクルシステム構築／環境モニタリングの要請・義務	システム構築／モニタリング等の費用負担
	ハザードベースでの化学物質規制の強化	使用できなくなる化学物質増加 製品の性能低下、あるいは、廃止による事業機会損失
	グローバルでの規制の不整合	EU・その他先進国・新興国での異なる規制への対応
市場	生活者の環境意識・エシカル嗜好の高まり	ブランド価値毀損、シェア低下
	評価機関・投資家の要求の高まり	情報開示不足による企業価値毀損
	流通の要求の高まり	取り扱い減少による売上減少
レピュテーション	特定の化学物質に対する風評／グリーンウォッシュ等の企業に対する風評	使用製品の販売機会損失
		ブランド価値・企業価値の毀損
		訴訟リスク

責任ある化学物質管理

(Chemicals Strategy for Sustainability :CSS) も大きな影響を及ぼすものと考えられます。加えて、このような環境の変化や規制の導入が進んだ場合には、市場や生活者の意識もそれに伴い変化し、リスク要因となることが考えられます。これらを踏まえた総合的な観点から、花王の化学物質管理におけるリスクの抽出を試みました。その結果を前ページの表に示します。

機会

「責任ある化学物質管理」を推進し、予期される影響やリスクに対する先回りの対策を講じ、化学物質の有用性を最大限に引き出すことは、気候変動や生物多様性損失の影響も含めたリスクを回避し、持続可能な社会の実現に貢献する機会であると考えられます。それにより社会的信頼も得て事業の成長が期待できます。

戦略

特定したリスクと機会に対し、シナリオ分析を通じて、レジリエント(強靱)な企業戦略の策定を試みました。

化学物質管理におけるシナリオ分析の試み

気候変動、生物多様性の分野においては、それぞれTCFD^{※1}、TNFD^{※2}のフレームワークに基づくシナリオ分析がすでに行われ始めています。これらの先行事例を参考にシナリオ分析を試みるにより、化学物質管理分野における花王にとってのリスク・機会が、仮定

したシナリオのもとでどの程度のインパクトをもたらすか、また、特にリスクに対しレジリエントであるためにはどのような戦略が有効であるのかを検討しました。

※1 TCFD: Task Force on Climate-related Financial Disclosures(気候関連財務情報開示タスクフォース)
※2 TNFD: Task Force on Nature-related Financial Disclosures(自然関連財務情報開示タスクフォース)

P114

脱炭素>戦略>事業インパクト>2030年における事業インパクトの試算

化学物質管理分野においては、いまだ同様のフレームワークは定まっていないものの、TCFD、TNFDに加え、SSPシナリオ^{※3}を参考にし、シナリオの作成及びそれらシナリオに基づく分析を試みました。

※3 SSPシナリオ: Shared Socioeconomic Pathways(共通社会経済経路)。気候変動による影響を評価するためのシナリオで、国立環境研究所、アメリカのパシフィックノースウエスト国立研究所、オランダ環境評価庁、オーストリアの国際応用システム分析研究所、ドイツのポツダム気候影響研究所が共同で開発

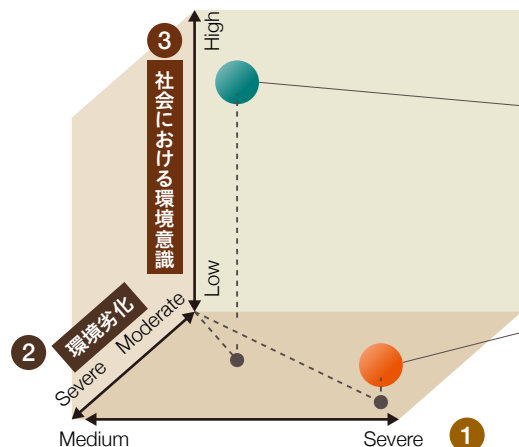
前掲の表からもわかるように、リスクに影響を与える因子は幅広く、また、不確実さも伴っています。こうした因子となり得る環境や規制、社会等の外部動向により、顕在化するリスクも大きく変わってくることが考えられます。そのため、無理にひとつの因子やひとつのシナリオに絞り込むのではなく、中期的に重要と考えられる外部環境の因子を複数ピックアップし、それらの変化度合いの違いにより複数のシナリオを描き、検討することとしました。

本件においては、シナリオの作成にあたり重要な因

子として、「化学物質規制の進展度(規制導入の程度、そのグローバル波及)」「地球環境の劣化度合い」「社会における環境意識の高まりの程度」を特定し、取り上げました。これら3因子を軸とした三次元の空間上において、次ページの図に示したように、この空間上で対極に当たる2点においてシナリオを作成し、これらをそれぞれ、シナリオA、シナリオBとしました。将来の不確実性がある中で、このように対極にあるシナリオを設定してリスクの影響を検討した上で導出した戦略は、この先の外部環境がどのように振れても、それらに対して有効なものとなり、花王のレジリエンス(強靱さ)につながるものと考えました。

責任ある化学物質管理

シナリオの要素と仮定したシナリオ



シナリオA

- ・地域により化学物質規制状況が異なる
- ・サステナビリティに関する社会意識は高く、企業活動に向けられる目は厳しい
- ・気候変動・生物多様性損失は一定レベルで抑えられている

シナリオB

- ・ハザードベースの化学物質規制がグローバルに波及
- ・サステナビリティに関する社会意識は低く、環境の劣化は進む
- ・異常気象・自然災害等により、自然由来資源は枯渇し、サプライチェーンの分断なども発生

化学物質規制の進展度(規制導入の程度、そのグローバル波及)

シナリオ分析(各シナリオ下におけるそれぞれのリスク発生確率の見積もりと各シナリオにおける有効な戦略)

	項目	花王にとってのリスク	各シナリオにおける影響度	
			シナリオA	シナリオB
環境変化	気候変動(気温上昇による自然災害の多発、エネルギーコストの上昇等)及び、生物多様性の損失	工場操業停止	M	VH
		サプライチェーンの分断	M	VH
		原材料価格の上昇	H	VH
		自然由来原料の不足・入手困難	M	H
政策と法規制	炭素税等の環境税導入	石油化学原料の価格上昇	M	VH
	リサイクルシステム構築／環境モニタリングの要請・義務	システム構築／モニタリング等の費用負担	M	H
	ハザードベースでの化学物質規制の強化	使用できなくなる化学物質増加 製品の性能低下、あるいは、廃止による事業機会損失	H	VH
	グローバルでの規制の不整合	EU・その他先進国・新興国での異なる規制への対応	VH	L
市場	生活者の環境意識・エシカル嗜好の高まり	ブランド価値毀損、シェア低下	VH	L
	評価機関・投資家の要求の高まり	情報開示不足による企業価値毀損	VH	M
	流通の要求の高まり	取り扱い減少による売上減少	VH	M
レピュテーション	特定の化学物質に対する風評／グリーンウォッシュ等の企業に対する風評	使用製品の販売機会損失	H	M
		ブランド価値・企業価値の毀損	VH	M
		訴訟リスク	H	H

それぞれのシナリオにおいて、先に抽出した花王にとってのリスク(前掲の表)が顕在化する確率(発生確率)を見積もりました。そして、それぞれのシナリオ下においてそれらリスクが顕在化した場合、どのような戦略が有効であるのか検討しました。それらの結果を以下の表に示しました。

世界的に厳しい化学物質規制となり、環境劣化が進展するシナリオBからは、環境負荷の低減に資する製品・プロセスの開発や安定的な原材料調達を含む安定した操業、化学物質による事故ゼロの実現などが重要となってくると考えました。

また、グローバルに異なる化学物質規制が進展し、ス

それぞれのシナリオにおける有効な戦略

シナリオB

環境負荷低減製品・プロセスの開発

安定した操業、化学物質による事故ゼロの実現

シナリオA

化学物質の適切なリスク評価・規制動向把握と戦略的な使用

社会から信頼されるためのコミュニケーション

(VH:極めて大きい、H:大きい、M:中程度、L:小さい)

責任ある化学物質管理

テークホルダーの意識が高まるシナリオ A からは、化学物質の適切なリスク評価・規制動向把握に基づく戦略的な化学物質の使用が重要であり、また、ステークホルダーから信頼を得るべく、透明性向上・コミュニケーション強化が必要と考えられます。

このようなシナリオ分析から導出した戦略を踏まえ、これまで取り組んでいた以下の3つの活動を中心として自主的かつより一層戦略的に取り組むこととしました。

①環境負荷低減製品・プロセスの開発

・製品ライフサイクル全体で環境負荷を最小化

②管理システム※1を活用したリスク評価手法の最適化 及びリスク評価・管理強化

・化学物質のリスク評価手法の最適化と、管理効率の向上
・化学物質による事故ゼロの実現と、地域社会の安全確保・安心の醸成

※1 物質情報、安全性情報、法規情報、数量・用途情報等

③有用性・安全性情報、取り組みの開示と継続的対話

・化学物質の有用性と安全性に関する情報をわかりやすく開示
・社会から信頼される企業になるためのコミュニケーション

このように広範な因子を用いてシナリオを検討する

アプローチをとった結果、シナリオ分析において、重要な未来の「振れ幅」を多面的に想定した上で戦略を導出することができ、それにより、花王の化学物質管理分野におけるさまざまなリスクに対して、レジリエントな取り組みのスタートにつながっているものと考えます。

社会的インパクト

化学物質管理は、資源枯渇、気候変動、生物多様性損失、水不足、大気・水質汚染、プラスチック問題、ごみ問題、誤情報・偽情報発信等、さまざまな社会・環境課題と深く関わっています。方針と戦略に基づき、産官学との連携を一層強め、リスク評価を含む化学物質管理の取り組みを社会と共有・協働していくことで、人々の安全・安心の確保や、環境を含むさまざまな社会課題の解決に貢献していきます。

貢献するSDGs



事業インパクト

原材料調達から廃棄・リサイクルまで環境負荷を最小化した製品を市場に投入し続けることで、持続的な

事業の成長につながります。

生活者、顧客、社員、流通、行政等、幅広いステークホルダーへの化学物質情報の開示とそれを利用したコミュニケーションの充実により、化学物質とその含有製品の理解が深まり、適正な取り扱い方法の普及が進みます。その結果、社会の安全・安心確保に加えて信頼の醸成が期待され、事業の成長につながります。

ガバナンス

体制

花王は、化学物質管理をESG戦略における重点課題のひとつとして捉えています。ESGコミッティでの意思決定を責任ある化学物質管理推進活動と事業活動により迅速に反映させるため、その下部組織として化学物質管理ステアリングコミッティを設置しています。

化学物質管理ステアリングコミッティで策定する大きな方針のもと、SAICM推進委員会が中心となり、製品ライフサイクルを通じての自主的な化学物質管理を推進しています。

当委員会は執行役員が委員長を務め、推進委員は主要な部門から選出されており、提案された取り組みは各部門の日々の業務に反映されています。決議事項はESGコミッティ、経営会議、執行役員会のいずれかの場において、化学物質管理ステアリングコミッティを通じて年1回以上報告し、意思決定の確実なプロセスを維

責任ある化学物質管理

持っています。

この委員会では活動を推進する5つのチーム※1を設置して戦略的な活動を推進しています。各チームのミーティングに加え、年に4回開催されるSAICM推進委員会では、計画、進捗報告、見直しのほか、新規課題の提案・議論や外部有識者を招いた講演会も開催しています。

花王SAICM有識者懇談会はSAICM推進委員長及び社外有識者で構成され、当懇談会から「責任ある化学物質管理」の考え方や方法へのご指摘・助言をいただくことで真のあるべき姿を追求し続けています。2023年には社外の視点を反映させるため、コミュニケーションの専門家もお招きし体制を強化しました。

※1 環境負荷最小化、リスク評価最適化、事故ゼロと地域社会の安全・安心、有用性・安全性情報開示、信頼性コミュニケーション

P25 Our ESG Vision and Strategy > ガバナンス

化学物質総合管理システム

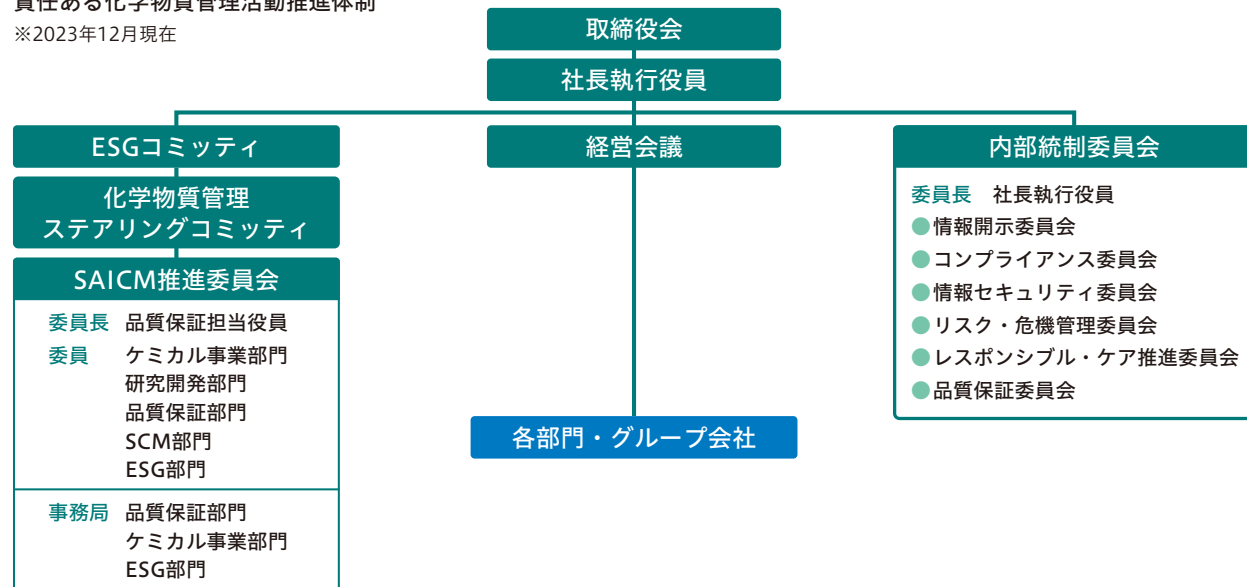
花王では化学物質管理体制の強化に加え、サポートツールとして「花王化学物質総合管理システム」を開発し運用しています。

このシステムでは、原料や製品及び含有する化学物質の情報をデータベース化し、安全性や法規制情報の管理を行っています。また、原料に問題が発生した場合は、影響範囲を迅速に特定し、適切な対応ができるようにトレーサビリティの確保に活用しています。

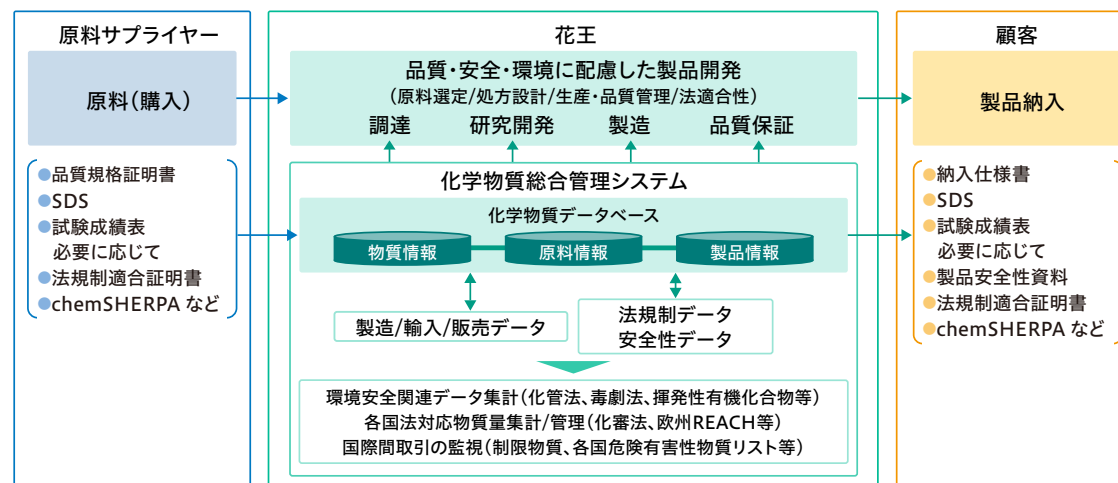
世界的な化学物質関連法規制の動向や事業環境の変

責任ある化学物質管理活動推進体制

※2023年12月現在



化学物質総合管理システム



責任ある化学物質管理

化に対応したシステム環境の整備と機能強化を継続します。

教育と浸透

化学物質管理の意識を高め、より正しい理解を深めるために、外部有識者の講演を含む社員向け教育を継続に行っています。例えば、化学物質取り扱い関係者への化学品法規説明会、製造現場での化学物質の危険性・有害性に関する教育、外部有識者講演会を毎年継続的に実施しています。

ステークホルダーとの協働

生活者を含むステークホルダーが、化学物質をより適切に使用し、安全に安心して暮らすためには、相互理解が不可欠です。私たちは、化学物質のリスクに関する情報をステークホルダーと共有し相互理解すること（リスクコミュニケーション）で、お互いの信頼と安心を育てられるよう、継続的に取り組んでいます。

また、化学物質管理に関連する学会などの専門家とも協働しています。

生活者との連携／コミュニケーション

製品を安全に安心してお使いいただくため、化学物質のリスクに関する情報についてコミュニケーションを継続しています。

顧客・代理店との連携

川上から川下まで、事業者が国内外の化学物質規制に準拠しつつ、化学物質を適切に取り扱えるように、サプライチェーンを通じてさまざまな情報が伝達されています。花王も顧客や販売代理店と協力して、効率的な情報伝達や管理に取り組んでいます。

行政との連携

化学物質に関わる規制当局の信頼を深め、化学物質を取り扱う企業としてより適正な化学物質管理を推進するため、国内外行政との対話と連携を継続しています。

産業界との連携

産業界の化学物質管理の取り組みに貢献するため、さまざまな活動に参加しています。

リスク管理

世界的に化学物質を取り巻く科学・規制・社会のそれぞれの分野で起こっている若しくは起こりうる課題を把握し、SAICM推進委員会が中心となり、リスクと機会を整理した上で、第三者の視点も取り入れながら、重要事項に優先的に取り組んでいます。例えば、化学物質を取り扱う現場では事故ゼロをめざしPDCAサイクルを継続的に回しています。

これらの取り組みを定期的に化学物質管理ステアリングコミッティを通じてESGコミッティに報告しています。

以上は事業機会確保、レピュテーションリスク回避にもつながっています。

P40 Our ESG Vision and Strategy > リスク管理

指標と目標

中長期目標と2023年実績

中長期目標

私たちは2030年長期目標実現のための中間点として、グローバルで存在価値ある企業“Kao”を実現する中期経営計画「K25」及びグローバル・シャープトップ事業を擁立する企業をめざす「K27」を掲げています。その筆頭の「持続的社会に欠かせない企業になる」においては、地球環境問題解決への取り組みは不可欠です。「正道を歩む」を活動の原点と考え、「責任ある化学物質管理」の実現を通じて持続可能なかたちで事業活動を発展させるため、2030年までに達成すべき目標を以下に決めました。

①環境負荷低減製品・プロセスの開発

原材料調達から開発、製造、販売、使用、廃棄・リサイクルまで製品ライフサイクルの全段階において化学物質に係る環境負荷を最小化するモノづくりを社会に提案し、社会と協働してその実行を促進し、持続可能な社会の実現に貢献します。

責任ある化学物質管理

(全社目標2030年ライフサイクルCO₂排出量削減率△22%(基準年2017年)に貢献、サステナブルケミカル品比率2024年80%)

②管理システムを活用したリスク評価手法の最適化及びリスク評価・管理強化

最適な化学物質のリスク評価手法を開発し、管理システムを駆使して、実際のリスク評価と管理強化を促進します。工場では事故ゼロを実現し、地域社会の安全確保・安心の醸成をめざします。また、リスク評価手法最適化研究の成果と評価結果を社会と共有し、化学物質のリスクが社会全体で適切かつ効率的に管理されることに貢献します。

(花王優先評価物質の評価:2030年目標100%、非動物評価法を使ったリスク評価の実施:毎年1カテゴリを目標)

③有用性・安全性情報、取り組みの開示と継続的対話

化学物質情報と花王の具体的取り組みの情報を正確にわかりやすく発信し、ステークホルダーと継続的なコミュニケーションを行うことで、化学物質に関する社会の信頼・安心を醸成します。

こうしたアプローチに対し、指標を策定し、2020年より公表しています。

〈指標1〉安心して使い続けられる製品・原料の有用性と
安全性情報の公開率(目標 100%(2030年))

人や環境への影響や、花王の企業活動における重要性などを考慮して公開する化学物質を選定しています。

〈指標2〉事業拠点において、原材料調達から廃棄までを
考慮し、健康・環境・安全への影響を管理できた
比率(目標 100%(毎年))

管理の要件は社会・環境の変化と共に変動します。その都度、現実的に利用可能な最良の方法で影響の最小化に努めています。

P43 Our ESG Vision and Strategy > 指標と目標

2023年実績

2023年の計画に沿って活動しました。製品・プロセスの開発、安全性評価、現場のリスク管理を通じて化学物質によるリスクを最小化し、情報開示・対話を通じて化学物質に対する社会の信頼と安心につなげる取り組みを継続しています。

①環境負荷低減製品・プロセスの開発

- ・サステナブル原料の利用向上とLC-CO₂削減、節水、廃棄物削減に貢献する製品を開発。
- ・環境負荷低減製品・プロセス開発の継続と受賞4件(GSC※1環境大臣賞、GSCポスター賞、第50回環境賞、CESIO※2技術賞)。

- ・化学物質総合管理システムの情報を活用した、規制・社会的に関心が高い成分の使用方針、削減計画の策定。

②管理システムを活用した、リスク評価手法の最適化及びリスク評価・管理強化

- ・花王優先評価物質の評価実施(2カテゴリ)。
- ・動物を使わない安全性評価技術に関する学会・論文発表を実施(日本毒性学会発表、日本動物実験代替法学会ポスター・受賞)、OECDテストガイドライン化に向けた取り組みを実施中。
- ・生物多様性に関する国際枠組み(UNEP, 2022)採択を受け、化学物質管理が生物多様性に及ぼすリスクと機会の把握及び活動の明確化。
- ・TCFDを参考にした化学物質管理が気候変動に及ぼすインパクトを把握(前項のシナリオ分析)
- ・工場内で取り扱う化学物質のリスク管理を強化するために、化学物質に関連した環境及び安全情報を一元管理するシステム構築を継続。

※1 GSC:Green and Sustainable Chemistry

※2 CESIO:European Committee of Organic Surfactants and their Intermediates(欧州有機界面活性剤委員会)

〈指標〉事業拠点において、原材料調達から廃棄までを考慮し、健康・環境・安全への影響を管理できた比率

事業拠点において、原材料調達から廃棄までを考慮し、健康・環境・安全への影響の管理(GHS表示、SDS更新、リスクアセスメント)を継続し、花王工場93%達成。

責任ある化学物質管理

GRI 413-1

③有用性・安全性情報、取り組みの開示と継続的対話

- ・ステークホルダーとの化学物質に関する対話をサポートする対話コンテンツを作成し、検証を実施。
- ・対話による花王の企業活動への理解の促進並びに化学物質に関する意識・行動変容を確認。
- ・ステークホルダーとして、医学部の学生・先生を対象とした化学物質のリスクコミュニケーションを継続。
- ・化学物質への疑問や不安を解消するため、生活者の思いとその背景を起点としたコンテンツや、対話手段の検討を継続。
- ・花王の工場と地域社会との共生による地域社会の安全確保・安心醸成をめざしたリスクコミュニケーション活動推進。
- ・化学物質管理に関する2020年国際目標未達を受けた国際枠組み採択に向け、国内外の業界団体及び行政と対話、及び採択後に今後の方向性について議論(合計12回)。

〈指標〉安心して使い続けられる製品・原料の有用性と 安全性情報の公開率

2021年に評価を行った花王優先評価物質の安全性要約書2件(2030年までの目標に対し公開率38%)、ケミカル製品のGPS 安全性要約書12件を開示。



2カテゴリ: アルコールエトキシレート、エチレンジアミン四酢酸
https://chemical.kao.com/jp/sustainability/saicm/article_05/

化学物質に関する取り組みで日本化学工業協会の「JIPS賞」を7年連続で受賞
https://www.nikkakyo.org/basic/page/JIPS_award.html

- ・社会的に関心が高い成分に関する方針及び香料成分名を開示。

P72 より安全でより健康な製品

P180 徹底した透明性

以上の取り組みにおいては、化学物質総合管理システムを応用・展開し、安全性評価、数量管理、法規や社会的に関心が高い物質等の情報の管理と開示に努めました。

2023年実績に対する考察

2030年中長期目標実現に向けて、2つの指標を含む2023年の計画を確実に実行しました。特に、化学物質管理に関する国際的な2020年目標の未達を受けた新たな枠組みの採択及びEU CSSに基づく規制改革は、世界的な影響が予想されます。このため、適切な内容となるように国内外の業界団体及び行政との対話や、パブリックコンサルテーションへの対応等を実施し、花王への事業影響を最小化し事業成長の機会を最大化することに努めました。

それぞれの活動を融合させ、かつ社会との連携を通じて、包括的に課題解決に取り組み、持続可能な社会の実現に貢献していきます。

主な取り組み

化学物質に関してさまざまなステークホルダーと、以下のようなコミュニケーションに、継続的に取り組みました。

生活者との連携／コミュニケーション

大学の講座と協働

- ・帝京大学医学部「衛生学公衆衛生学実習」で「環境保健」班に協力
- ・横浜国立大学リスク共生社会創造センターの講座「リスク社会とコミュニケーション」に協力

これらの協働を通じて化学物質への疑問や不安を解消し企業活動や化学物質に対する意識・行動変容を促すための対話手段の検討も行いました。



帝京大学医学部 衛生学公衆衛生学実習
<http://www.med.teikyo-u.ac.jp/~hph/education.html>

横浜国立大学リスク共生社会創造センターの講座「リスク社会とコミュニケーション」に協働
<https://www.kao.com/jp/newsroom/news/topics/2023/sustainability-20230726-001/>

地域住民とのコミュニケーション

工場周辺の皆さまに安心して暮らしていただくため、工場施設からの漏えいや爆発を想定しそれらの影響を最小化することを目的として、和歌山市消防局との定期的な対話と合同訓練を実施しました。

責任ある化学物質管理 GRI 413-1, 417-1



花王和歌山工場 - 和歌山市 事故対応合同訓練
<http://www.city.wakayama.wakayama.jp/syoubou/news2/1008541/1050921.html>

顧客・代理店との連携

製品含有化学物質情報の提供

自社の工業製品が含有する化学物質の規制情報等の提供にあたっては、業界共通の情報伝達書式「chemSHERPA-CI^{※1}」を活用して、サプライチェーン上での効率的な伝達を行うと共に、その更新を年2回実施し、最新情報の提供を継続しました。

※1 chemSHERPA-CI
特定の化学物質情報を伝達するための化学品データ作成支援ツール及びその帳票。

SDS^{※2}及び製品ラベルのGHS対応

工業用製品が現地の法令に基づき適正に使用されるように、各国・地域のGHSルールに対応したSDSや製品ラベルの作成や改訂を進めました。

国内においては、2023年の化管法改正に対応したSDS改訂を施行日までに完了し、顧客への提供を行いました。

※2 SDS
Safety Data Sheet
化学製品を安全かつ適切に取り扱うために、製品に含まれる物質名、危険有害性情報、取り扱い上の注意などに関する情報を記載した書類。

専用ネットワークによる情報提供・情報交換

工業用製品の販売代理店との専用ネットワークを活用して、オンラインでSDSやchemSHERPA-CIなどの

情報を提供し、サプライチェーン上での化学物質管理の推進を継続しました。また7月には販売代理店の新入社員を対象に隔年実施の研修会をオンラインで開催し、化学物質管理について説明を行いました。さらに12月にも、主要な販売代理店に対しては個別に総合安全管理に関する情報交換会をオンライン及び対面で実施しています。最新の法規制動向について説明を行うと共に、花王の化学物質管理の取り組みについて、理解と協力をお願いしました。

行政との連携

規制当局の信頼を深め、化学物質を取り扱う企業としてより適正な化学物質管理を推進するため、行政機関等と6回の情報交換を行いました。

テーマ:ポストSAICM、レギュラトリーサイエンス、イノベーション、信頼性保証のための相互認証、製品安全、欧州の持続可能な化学物質戦略 (EU Chemicals Strategy for Sustainability; EU CSS)

また化学物質に関する2020年以降の国際枠組みの採択に向けて行政機関と業界団体との意見交換を調整・推進したほか、講演を通じて採択後の国内周知と連携の推進を図りました。



NITE(製品評価技術基盤機構)
NITE 講座(化学物質管理)
<https://www.nite.go.jp/data/000152323.pdf>
<https://www.nite.go.jp/data/000152357.pdf>

産業界との連携

EU CSSに基づき、2023年にREACH規則、CLP規則の改正に向けた各種パブリックコンサルテーションが行われました。私たちは、将来の事業への影響を最小化すべく、情報収集に努めると共に、より適切な規制となるように主要な役割を務める業界団体を通じて、行政とのコミュニケーションを行いました。

このほか、化学物質管理に関する2020年国際目標未達を受けて採択されたGlobal Framework on Chemicalsへの対応に向けて各業界団体内での議論を先導したほか、業界団体広報誌と年報等で産業界及び個社としての取り組みを発信し化学物質管理の価値伝承と社会からの信頼醸成に努めました。



日本石鹸洗剤工業会
CLEAN AGE 273号
https://jsda.org/w/06_clage/4clean_273-2.html

環境年報 Vol.48
https://jsda.org/w/00_jsda/9_Annual-Report/Environmental-Annual-Report_Vol.48_2023.pdf

化学物質と環境 No.178 (2023.3) (エコケミストリー研究会)
<http://ecochemi.jp/mokuji151-200.html>

責任ある化学物質管理

ステークホルダー・エンゲージメント

松下 和夫 氏
京都大学名誉教授



2023年は観測史上最も暑い年となりました。グテーレス国連事務総長は、「地球温暖化の時代は終わりを告げ、地球沸騰化の時代が到来した」との警告を発しています。第28回気候変動枠組条約締約国会議(COP28)では、化石燃料からの脱却、2030年までに再生可能エネルギー容量を世界全体で3倍、エネルギー効率改善を世界平均年率2倍にすることが合意されました。

一方、地球環境の健全性を示す概念であるプラネタリーバウンダリーは、2014年の評価では、9つの指標中、気候変動、生物多様性、地球規模の土地利用、生物地球化学的循環の4つが限界値を超えて

いましたが、2023年9月の評価では、これらに加え、淡水利用と新規化学物質の2項目、合計6項目で境界を上回っていると評価されています。

化学物質の国際的管理の動向としては、2023年9月に、安全で健康でサステナブルな未来のために、化学物質と廃棄物の悪影響のない地球をめざすGlobal Framework on Chemicalsが採択されました。

こうした世界的な動向のもと、花王では、国際目標に先駆け、リスクが適切に管理され化学物質の恩恵を享受する安全で安心な社会をめざすKao SAICM(責任ある化学物質管理)を制定し、ESG活動を通じて先導し、次のようなアプローチをとってきたことは高く評価できます。

- ①製品ライフサイクル全体で環境負荷最小化
- ②化学物質による事故ゼロ実現と、地域社会の安全確保・安心の醸成
- ③化学物質のリスク評価手法最適化と、管理効率

の向上

- ④化学物質の有用性と安全性に関する情報のわかりやすい開示
- ⑤社会から信頼される企業になるためのコミュニケーション

例えば①については、サステナブル原料利用率向上、規制懸念物質含有量低減、製造現場での冷媒変更、ケミカル製造工程での省エネ、電化、バイオマス利用によるCO₂削減などに具体的に取組んだことが注目できます。また、②の具体的活動として、所轄消防局とのリスクコミュニケーション醸成のために合同訓練を実施し、より実践的な連携をめざしてきたことも評価できます。

今後とも花王における化学物質管理におけるフロンタランナーとしての取り組みを期待するものです。